

# NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

May 2022 vol.34



島根県芸術文化センター  
SHIMANE ARTS CENTER  
島根県立石見美術館  
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「平川紀道・野村康生 既知の宇宙 | 未知なる日常」

展覧会で何に出会う? 既知のイメージ | 未知なるビジョン

報告「澄川喜一のスケッチブック」

デッサンとスケッチから紐解く創作の秘密

令和3年度寄贈の日本絵画紹介

石見の南蘋派とその門下—三浦紫暁と齋川芳暁—

34



澄川喜一《そのあるかたち97-3》 1997年 当館蔵

## 「平川紀道・野村康生 既知の宇宙 | 未知なる日常」

2022年7月2日(土)～8月29日(月)

休館日:毎週火曜日 開館時間:9時30分～18時(展示室への入場は17時30分まで)



図1



図2

図1. 平川紀道「observers」 2008年、島根県立石見美術館での展示

図2. 野村康生「Dimensionism2.0 2.0」 2020年、NOWHERE ギャラリー(ニューヨーク)での展示

## 展覧会で何に出会う? 既知のイメージ | 未知なるビジョン

2022年夏の企画展は、国内外で活躍する島根県西部・石見地域出身のアーティスト、平川紀道(1982年浜田市〈旧三隅町〉生まれ)と野村康生(1979年益田市生まれ)の2人が新作を披露する場となる。過去の企画展とは様相を異にするため、現代アートになじみのない方は戸惑うことも予想されるが、戸惑いや驚きをポジティブに楽しみ、目からウロコを落とすのがアートの醍醐味だ。

これまでの企画展は、例えば「石見の仏像」や「こども服」といったテーマに沿って数十から数百点の彫刻や絵画や衣装などを並べる、あるいは黒田清輝や森英恵といった巨匠の初期から晩年または直近の作品までを回顧するものがほとんどだった。来場者は文化の歴史や作家の歩みを、学芸員が示す解説や順路によってたどる。ギャラリートーク(作品解説)の後で「やっぱり説明をきくとよく分かる」と喜ばれたり、「順路が分かりにくい」とか「作品が少ない」とかいう苦情を受けたりすると実感するのだが、多くの方は展覧会という場を、一堂に会したたくさんの品々を、整理された情報とともに見て理解し、満足を得る場としてとらえているようだ。

今度の企画展は、多数の作品を整然と並べるのではなく、空間に合わせて作品を

設置したり、プロジェクターで映像を投影したりする「インスタレーション」の形式をとる。そのため会場は、これまで企画展に使ってきた、広くて間仕切り壁が多く大量の作品が陳列できる展示室Dではなく、やや小ぶりで形状も内装も個性的な展示室A、B、Cの3部屋に設定した。黒くてひっそりした洞穴のような展示室Bでは平川が、壁が真っ白で天井が高く開放的な展示室Cでは野村が、空間の特徴を生かして作品を配置する。それらは、私たちの身体(=日常)から宇宙までを射程に入れ、それぞれの切り口によって「私たちが生きる世界は、このように見ることができる」という提示をするものとなるだろう。

さらに展示室Aには、2人の指示によって来場者が手を動かし、進行中の作品に参加する場も設けられる。つまり本展を訪れる者は、作品を自らの外側にあるものとして眺めるのではなく、アーティストのビジョンにとり込まれたり、共謀者になったりするのだ。

従来の企画展が、起承転結を考えて編集された教養番組を視聴する体験だとすると、本展は上演内容が明かされないライブ会場に足を踏み込むような体験になる。言語化は後からでいいし、できなくてもいい。ここで受けた刺激が、何かの折にフラッ

シュバックして腑に落ちるということもあるかもしれない。

「内容が明かされない」のは、全てが新作のため本紙のような告知媒体にも「この作品が出ます」という写真を載せられないからでもあるが、来場者が事前に目標を定められないよう、あえて説明を避けている部分もある。「そうそう、これが見たかったのよ」というように、既知の対象を確認する展覧会ではないのだ。

本展のキャッチコピーは、平川と野村との議論をふまえ「石見出身のアーティストが描くスペキュラティブな世界像」とした。「スペキュラティブ」とは、「未知のことがらについて思索するための」というような意味の言葉だ。

平川は「眼で見ているもの、耳で聞いているものは世界そのものではない」といい、野村は「芸術の歴史、特に現代アートといわれる分野のそれは“私たちの世界観”にどう揺さぶりをかけ、どう拡張させることが可能か、に挑戦してきた歴史」だという。すでに一筋縄ではいかない予感に満ちているが、アーティストが提示する「未知なるビジョン」を知り、新しい感覚を手に入れるために、ぜひ会場を訪れてほしい。



A



B



C

A. 澄川喜一《OROCHI》制作年不詳 紙  
 B. 澄川喜一《OROCHI》2005年 御影石  
 C. 澄川喜一《谷中五重塔》1957年 紙

## デザインとスケッチから紐解く創作の秘密

彫刻家であり、島根県芸術文化センターのセンター長でもある澄川喜一は、代名詞にもなっている木彫作品だけでなく、全国およそ百カ所の野外彫刻や、公共建築のデザイン監修など幅広く活躍している。澄川は他の作家同様創作に当たって数多くの詳細なデザインを作成し、自分のアイデアをまとめていたのだが、これまで澄川がデザインを公開することはほとんどなく、その考察の過程を知ることは出来なかった。

しかし、2020年度および2021年度、澄川から当館に対して膨大な作品の寄贈があり、同時に資料として、スケッチブックやモニュメントの設計図面、マケットなどの寄贈もあった。当館では、作品の整理と平行して資料の整理も行っているが、澄川の代表作にかかわる複数のデザインも含まれていることが判明した。

これらのデザインを詳細に見ると、初期の段階では完成された作品とはかなり異なるものである場合が多く、澄川の苦悩の様が目に浮かぶようである。

当館のある島根県芸術文化センターの前庭には、澄川が2005年に制作したOROCHIがある。筆者は当時同作品の設置にかかわったが、当初見せられたスケッチブックには、やや抽象的なオロチが描

かれていた。

しかし、その後澄川は「子供が遊べるようなものに変えた。」と述べ、制作に取りかかった。完成した作品は、当初のデザインとはかなり異なり、顔は具象的なユーモアあふれるものになり、鼻には子供が手を入れられるように鼻腔が開けられ、小さな子供でも手が届くように踏み台まで設置された。

今回寄贈されたスケッチブックには、当館の作品だけでなく、全国の様々な作品にかかわるデザインも含まれており、今後澄川を研究する上で欠かせない資料となるだろう。

澄川は若い頃、その後の彫刻家人生を方向付けたようなふたつの大きな出来事に遭遇している。ひとつは1950年のキジア台風で、当時住んでいた岩国市の錦帯橋が流される様子を目撃した。今ひとつの出来事は、1957年の谷中五重塔焼失である。近くに住んでいた澄川は直接目撃し、後年次のように語っている。「あの時は弁慶がたくさん矢を全身にうけて仁王立ちのまま絶命したような印象を受けました。(中略)細い材木は焼け落ちて太い柱は炭化して残り、倒れない。放火で下から燃えたから、炎もすごかった。巨大な護摩を焚いたようでした。」(「アート・トップ」149号、「巻頭特集 澄川喜一の新・空間主義」、芸術新聞社、1995年)

恐らくこの場面を描いたであろうスケッチが今回の資料の中から見つかった。現場で一気に仕上げたようなスケッチであるが、まさに澄川の言うとおり弁慶の立ち往生を彷彿とさせる。澄川は衝撃を受けるだけでなく、その衝撃を芸術作品へと昇華させた。その後この作品をモチーフとした作品を澄川は発表していないが、このスケッチ以上に、澄川の衝撃の大きさを伝える作品は作れなかったのかもしれない。

澄川の彫刻作品だけでなく、野外彫刻の図面やスケッチなど、澄川の仕事を紹介する特別展「受贈記念 彫刻家・澄川喜一の仕事」が、2023年2月4日から4月3日まで当館で開催される。澄川の創作の秘密に触れる絶好の機会である。

## 石見の南蘋派とその門下 —三浦紫畹と斎川芳畹—

日本美術の歴史を紐解くと、「南蘋派」と呼ばれる画家たちがいる。江戸時代の享保16年(1731)に、中国・清時代の画家である沈南蘋が長崎に来訪し、その後南蘋に直接師事した画家たちから全国へ、南蘋の写実的な画風が広まった。こうして南蘋の画風で活躍した画家たちが、「南蘋派」である。

江戸時代の石見国津和野藩(現在の島根県津和野町)は、文武両道を方針として多くの学者や文化人を輩出し、美術の分野についても様々な画家が百花繚乱のごとく活躍した。その中には、南蘋派の三浦紫畹とその弟子たちの存在もあった。

幸いにも令和3年度には、三浦紫畹の作品1点と、その弟子の一人である斎川芳畹の作品2点が当館へ寄贈された。以下では、これら3点の寄贈作品について紹介したい。

まず1点目は三浦紫畹《孔雀図》(図1)。三浦紫畹(1773-1856)は津和野藩お抱え絵師・三浦南溪の子で、父の没後に津和野藩の命により家業を継いだ。寛政3年(1791)から津和野藩の江戸藩邸に勤め、南蘋派の宋紫山に師事し、その後は津和野藩お抱え絵師として活躍した。文化3年

(1806)に幕府測量方(伊能忠敬)が益田高津浦(現在の島根県益田市)の測量を行った際には、津和野藩お抱え絵師の大島松溪とともに海図調製を担当。文政2年(1819)の藩用客舎の新築落成に際しては、その障壁画を描いた\*1。

紫畹の作品には、図1のような孔雀に牡丹を描いた作品が多い。図1の孔雀は濃い色彩で細部まで緻密に描かれており、羽には金泥も使われることで、きらびやかさが増している。屏風の大画面に孔雀が実物大のサイズで描かれているため、まるで実際の孔雀が目の前にいるかのような臨場感も生み出されている。画面の右端には「幽谷亭紫畹六十一翁」と書かれている。「幽谷亭」は紫畹の号(絵師としての名)であり、紫畹61歳、天保4年(1833)の作だとわかる。

2点目に紹介するのは、斎川芳畹《墨竹図》(図2)。斎川芳畹(1797-1885)は、石見国美濃郡下種村(現在の益田市下種町)の庄屋斎川家の4代目である。10代後半から三浦紫畹の教えを受け、その才能を認められていた。紫畹に師事した後は、庄屋職の傍ら画業に励み、墨による竹の絵を得意とした\*2。

図2は、霞の中で竹が立つ様子を墨で描いている。画面左端には「朝雲密翠」「芳畹八十二翁」と記されているため、描かれているのは早朝の竹であることと、芳畹82歳、明治11年(1878)の作であることがわかる。図2のような「朝雲密翠」の他にも、岩壁の傍の竹を描いた「巖傍幽翠」、月光に照らされる竹を描いた「鳳枝吟月」、竹と蘭を共に描いた「源山二友」など、芳畹の竹図には様々なバリエーションがあったことも知られている。

3点目に紹介するのは、斎川芳畹《墨梅図》(図3)。芳畹の作品には梅図や菊図も残されており、図3もその一例である。画面左端には「嶺谷老樵戲毫」と記されている。制作年代は不明だが、「嶺谷老樵」は芳畹の号の一つであろう。図2と同じ「芳」「畹」の印章(白文連印)が捺されているため、芳畹の作であることは確かである。

以上の3点の作品を踏まえつつ、引き続き津和野藩で活躍した画家たちの調査研究を進めていきたい。

\*1 加部巖夫『三浦紫畹小伝』(1933年)

\*2 『益田古文書を読む会成果報告書2』(益田古文書を読む会、2022年)37-65頁

(角野広海 当館学芸員)



図1

図1. 三浦紫畹《孔雀図》 天保4年(1833) 島根県立石見美術館蔵

図2. 斎川芳畹《墨竹図》 明治11年(1878) 島根県立石見美術館蔵

図3. 斎川芳畹《墨梅図》 江戸時代末~明治時代初期 島根県立石見美術館蔵

※掲載作品は全て大久保東氏寄贈(令和3年度)



図2



図3